

資料 Data

広島県福山市鞆町の「鞆の津塔」

佐藤大規¹・檀上浩二²

Tomonotsuto (stone pagoda of tomonotsu) in Fukuyama city, Hiroshima

Taiki SATO¹ and Kouji DANJO²

要旨：著者らは、鞆の浦の社寺建築および社寺境内の石造文化として特に重要と思われる鞆の津塔について調査を行う機会を得た。1基ごとに実測図を作成し、さらに造立年代や構造形式などについて調査を行った。その結果、鞆の津塔は、五輪塔と宝篋印塔の部材を混在させた石塔と考えられた。また基礎正面に東で2分割した格狭間、両側面に通常の格狭間を彫ること、さらに隅飾が同時代の宝篋印塔と比べて外側への傾斜が極めて少なく伝統的であることなどが特色として挙げられた。またおおよそその造立年代が17世紀頃と推測され、約100年の間に集中的に造立されたという可能性が指摘できた。さらに規模が大きく、そのような石塔の施主が商人であることなどが注目され、裕福な商人の経済力を背景に造立されたものと考えられ、鞆の浦の港町としての繁栄を物語る歴史資料として重要である。

キーワード：五輪塔、石造文化財、鞆の浦、福山市、宝篋印塔

I. 緒言

石塔には、層塔・宝塔・多宝塔・宝篋印塔・五輪塔などと多様な種類がある。また大分県の国東半島にのみ所在する国東塔¹⁾のように、その地方にしか見られない地方色が豊かで独特な形式を持つ石塔も存在している。

ところで、鞆の浦（広島県福山市鞆町）は、古くから繁栄してきた港町であり、現在でも港湾施設や伝統的な町並、社寺が残る全国的に見ても有数な港町である。筆者らは、鞆の浦の社寺建築および社寺境内の石造文化として特に重要と思われる鞆の津塔²⁾について調査を行う機会を得た³⁾。鞆の津塔はこれまで15基が確認され、五輪塔と宝篋印塔の要素を融合させた、鞆の浦独特な石塔であることなどが報告されている（檀上、2000）。今回の調査は、以前の調査を補完する形で、1基ごとに実測図を作成し、さらに造立年代などについての調査を行った。本稿では調査結果を提示した上で、鞆の津塔の形式や造立年代などについて若干の考察を行いたい。

II. 鞆の津塔の概要

まず、鞆の津塔の構造について記しておく。なお以下に記す鞆の津塔の部材名称は、五輪塔と宝篋印塔の部材名称を踏まえたものである。

鞆の津塔は、地面に反花座もしくは練形座を置き、その上に方形の基礎を載せる。基礎上には、円形の五輪塔の水輪が載り、宝篋印塔の塔身に相当すると考えられる。その上には、隅飾を付し、段を付けた宝篋印塔の笠を載せる。笠には段が付くが、その一番上は宝篋印塔に準じれば露盤である。なお、宝篋印塔の笠下端に付される段は省略されているが円形の塔身上に載せるため安定性を考慮したものと考えられる。露盤には宝篋印塔とは順番を逆にして、受花（下）と伏鉢が載り、さらにその上に受花（上）と宝珠を置く。伏鉢・受花（上）・宝珠は、一石からなる。なお宝篋印塔における九輪は省略されている。

III. 鞆の津塔の個別解説

現在、鞆の浦で確認されている鞆の津塔は、安国寺（臨済宗）に1基、大観寺（真言宗）に2基、阿弥陀寺（浄土宗）に12基の計15基である。ここでは、

1 広島大学総合博物館：Hiroshima University Museum

2 福山市教育委員会：Fukuyama City Board of Education

表1 鞆の津塔一覧

名称	造立年代	高さ	格狭間 (正面)	格狭間 (側面)	文字	戒名	台座	基礎	塔身	笠	受花 (下)	伏鉢・受花(上) ・宝珠
安国寺	承応3年(1654)	239cm(台座下端～)	上部に線形	×	地水火風空	○(正・側面)	○	○	○	○(9)	○	○
大観寺①	16世紀後～17世紀初期*	185cm(基礎下端～)	○	○	×	×	×	○	○	○(7)	○	○
大観寺②	寛文5年(1665)	267cm(台座下端～)	×	×	種子	○(正・側面)	○	○	○	○(5)	○	○
阿弥陀寺①	17世紀中期*	167cm(基礎下端～)	不明	不明	×	不明	×	○	○	○(6)	×	○
阿弥陀寺②	正保3年(1649)	179cm(基礎下端～)	○	○	南無阿弥陀仏	○	×	○	△	○(7)	×	△
阿弥陀寺③	寛文年間	139cm(基礎下端～受花(下)上端)	○	不明	×	○	×	○	○	○(7)	△	△
阿弥陀寺④	17世紀中期*	130cm(基礎上端～)	不明	不明	×	不明	不明	○	○	○(7)	×	○
阿弥陀寺⑤	17世紀中期*	145cm(基礎上端～)	不明	不明	×	不明	不明	○	○	○(6)	○	○
阿弥陀寺⑥	寛文2年(1662)	203cm(台座下端～)	○	○	×	×	○	○	○	○(6)	△	△
阿弥陀寺⑦	17世紀中期*	139cm(基礎上端～)	不明	○	×	不明	不明	○	○	○(6)	×	○
阿弥陀寺⑧	17世紀中期*	191cm(基礎上端～)	○	○	×	×	○	○	○	○(6)	○	○
阿弥陀寺⑨	17世紀中期*	133cm(基礎上端～)	○	○	種子	○	不明	○	○	○(6)	×	△(風・空の刻銘四方)
阿弥陀寺⑩	寛文12年(1672)	191cm(基礎下端～)	○	○	南無阿弥陀仏	○(女性)	×	○	○	○(8)	○	○
阿弥陀寺⑪	慶安4年(1651)	200cm(基礎下端～)	○	○	南無阿弥陀仏	○	○	○	○	○(6)	○	○
阿弥陀寺⑫	17世紀前期*	233cm(台座下端～)	○	○	種子	○	○	○	○	○(7)	○	○
宝大寺①	文政元年(1818)	176cm(台座下端～)	×	×	地水火風空	○	○	○	○	○(1)	○	○
宝大寺②	18世紀後～19世紀初期*	191cm(台座下端～)	○	×	地水火風空	×	○	○	○	○(1)	○	○

註1：造立年代の※は推定年代を示す。

註2：表中の△は別塔の部材，×は欠失していることを示す。

註3：項目笠の()は段数を示す。

各寺院の概略を記し、その上で全15基の鞆の津塔の概要や造立年代を個別に述べることにする(表1)。なお、各塔の刻銘については、実測図には反映させていない。なお、鞆町に近接する福山市沼隈町に所在する宝大寺には、鞆の津塔と同形式の石塔が2基存しているため、ここに紹介しておく。

1. 安国寺

安国寺(広島県福山市鞆町後地)は、足利尊氏の命によって全国に開かれた安国寺のうちの備後安国寺である。室町幕府の衰退とともに荒廃したが、慶長4年(1599)に毛利輝元によって復興された⁴⁾。江戸時代になり再び荒廃するが、昭和になり漸く再興された。室町時代に創建された重要文化財の釈迦堂が現存する。なお、釈迦堂後方に位置した本堂は大正9年(1920)に焼失している。現在は、山門を入れて左手に本堂が東を向いて立ち、その前に子安観音堂、本堂の北側に釈迦堂がある。鞆の津塔は、本堂背面にある墓地の入口付近に存している。

安国寺(図1・写真1⁵⁾)

高さは、台座下端から宝珠上端まで239cm(基礎下端からは218cm)である。江戸時代の墓石を転用した2段の台石上に反花座を置き、その上に基礎を載せる。基礎の正面側面には枡を取る。正面のみ枡内に格狭間の上部線形を彫り、その頂点に「地」の刻銘がある。正面の枡外右側に「甲 承應三曆」、左側に「午九月二日」と刻銘があることから、造立年代は、承応3年(1654)9月2日である。正面側面のそれぞれの枡内には、臨濟宗の戒名を刻む。また左側面には寛延2年(1749)6月に戒名を追記したことを示す刻銘が

ある。

基礎上にはやや肩の張った塔身を置き、その上に笠を載せる。笠に付された隅飾は外側にわずかに傾斜する。笠の段は、9段で一番上が露盤である。露盤に受花(下)を置き、その上に一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠を載せる。また塔身・笠・受花(上)・宝珠には、順に「水」・「火」・「風」・「空」の刻銘がある。この鞆の津塔は、台座から宝珠までが完存している。また「地・水・火・風・空」の刻銘があることから、五輪塔との関連を示す貴重な事例である。

2. 大観寺

大観寺(広島県福山市鞆町後地)は、沼名前神社前に位置する真言宗の寺院で、昭和13年(1938)に増福寺・玉泉寺・地福院・宝巖寺・常喜院の五カ寺を統合し、一つにしたもので、現在の本堂・山門・鐘楼は、その時に建立されたものと考えられる。山門を入ると正面に本堂が南向きに立ち、本堂の向かって左手に鐘楼が立つ。鞆の津塔は、本堂の東側に位置する墓地に2基存している。本稿では、便宜上、本堂に近い方を①とした。なお元々はいずれの寺院にあったものかは不明である。

大観寺①(図2-1・写真2)

この鞆の津塔は、大観寺に存する2基のうち、向かって左側(西側)に立つ。高さは、基礎下端から宝珠上端まで185cmである。後補の台石上に基礎を置き、その上に押し潰したような楕円形の塔身を載せる。基礎の正側面は枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、両側面は通常の格狭間を彫る。塔身に載る笠に付く隅飾は、ほぼ垂直に立つ。笠の段は7段で、一番上

が露盤である。笠の上に、受花（下）と一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。台座を欠くものの、基礎から宝珠は揃っている。

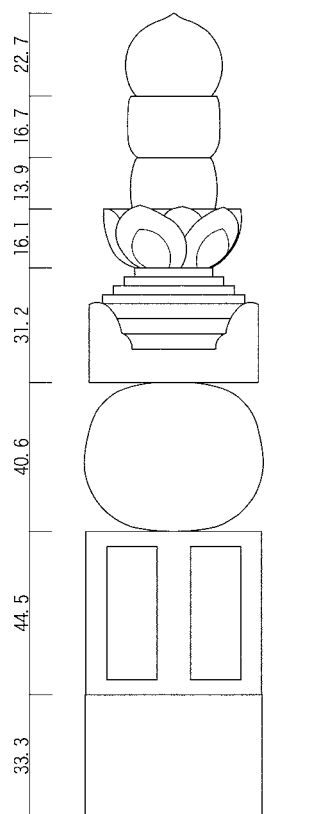
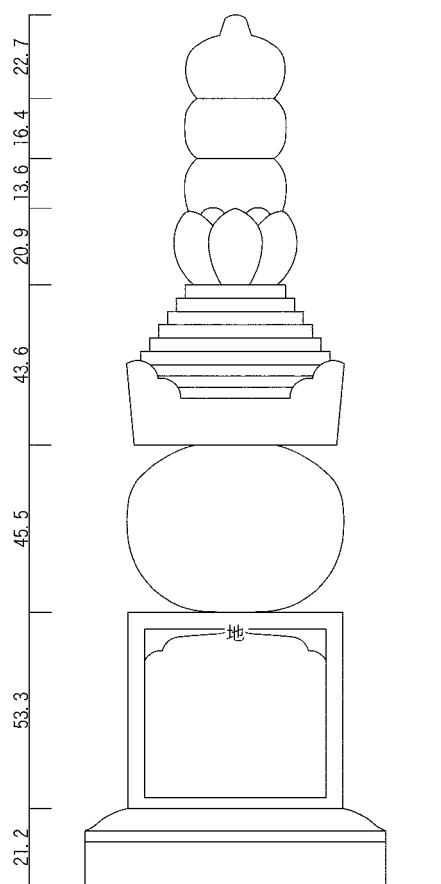
大観寺②（図2-2・写真3）

この鞆の津塔は大観寺に存する2基のうち、向かって右側（東側）に立つ。高さは、台座下端から宝珠上端まで267cm（基礎下端からは242cm）である。後補の台石上に反花座を載せ、その上に基礎を置く。基礎の正面には、上辺の中央部を少し下に丸く垂らした枠を取る。造立年代は、枠外の右側に「寛文五^五曆孝子」、左側に「五月十九日敬白」と刻銘があることから、寛文5年（1665）5月19日である。また基礎の正面と両側面の枠内には戒名が刻まれており、それから鞆町の商人表屋によって造立されたことが知れる。基礎正面の枠を窪ませた箇所には、種字を刻む。基礎上の塔身はやや肩を張った円で、その上に載る笠の隅飾は、

わずかに外側に傾斜する。笠の段は5段で、一番上が露盤である。露盤上に受花（下）を載せる。受花上には、一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を置く。塔身・笠・伏鉢・宝珠に種字を刻む。

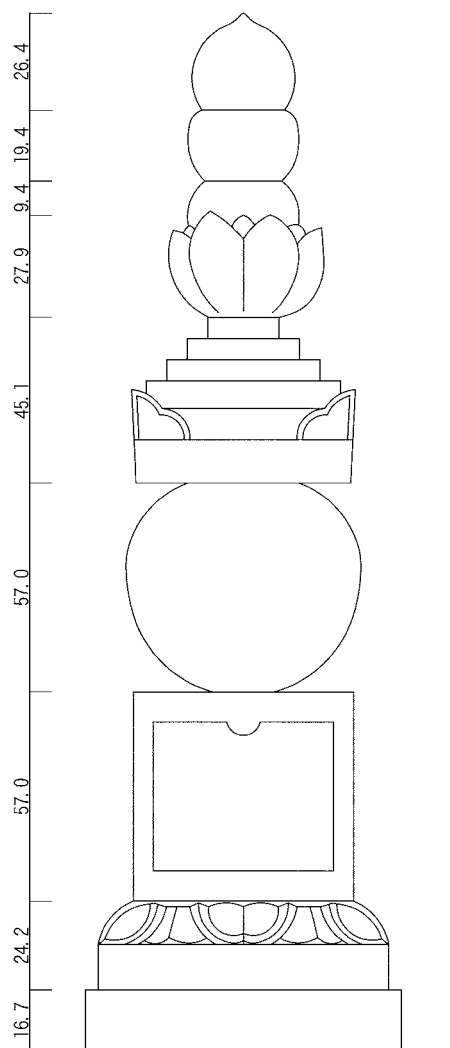
3. 阿弥陀寺

阿弥陀寺（広島県福山市鞆町後地）は浄土宗寺院で、永禄8年（1565）に阿蓮社天譽峯井上人を開基として創建されたと伝えられる。創建時は鞆城の麓にあったが、慶長年間（1596 - 1615）に現在地に移されたという⁶⁾。山門を入った正面に本堂が立ち、右手に観音堂と鐘楼、左手に鎮守社である貞城稻荷神社と地藏菩薩の覆屋が立つ。鞆の津塔は、本堂の北側にある墓地に12基が散在している。本稿では、便宜上、東側に位置するものを①とし、最も西側に位置するものを②とした。



1

図1 鞆の津塔（安国寺）単位：cm



2

図2 鞆の津塔（大観寺）単位：cm

阿弥陀寺① (図3-1・写真4)

この軀の津塔は、阿弥陀寺に存する12基のうち、最も東側に立つ。高さは、基礎下端から宝珠上端まで167cmである。台座はなく、基礎が直に地上に立つ。その上の塔身は、わずかに肩が張った円形となり、その上に載る笠の隅飾は、わずかに外側に傾く。笠の段は6段で、一番上が露盤である。露盤上の受花(下)は欠失していて、直接に一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠が載る。

阿弥陀寺② (図3-2・写真5)

この軀の津塔は、①の西南側に立つ。高さは、基礎下端から宝珠上端まで179cmである。台座はなく、基礎が直に地上に立つ。基礎の正側に柵を取り、正面には、東で2分割された格狭間、両側面に通常の格狭間を彫る。造立年代は、基礎正面の柵外右側に「正保三天」、左側に「九月十九日」と刻銘があることから、正保3年(1646)9月19日である。東部分には、女性の戒名が彫られ、その上部に「佛」と刻む。基礎上の塔身は楕円形である。この塔身の中心部分には種字を刻んでいるが、ほかの部材には種字が見られないため別塔のものと考えられる。その上の笠には「弥」の刻銘があり、隅飾はわずかに外側に傾斜する。笠の段は7段で、一番上が露盤である。その上の受花(下)は欠失しており、一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠が笠上に載る。伏鉢・受花(上)・宝珠は、その下部と大きさの均整が取れていないこと、「南」・「無」・「阿」の刻銘がないことから、別塔のものと考えられる。この軀の津塔は基礎・笠、塔身、伏鉢・受花(上)・宝珠がそれぞれ別塔のものであり、それらの部材を寄せ集めて一つの軀の津塔にしている。

阿弥陀寺③ (図3-3・写真6)

この軀の津塔は、②の後方に立つ。高さは、基礎下端から受花上端まで139cmである。台座はなく、基礎が直に地上に立つ。基礎正面は柵を取り、東で2分割した格狭間を彫る。左右背面は、ほかの石造物が近接して立っているため実見できなかった。造立年代は、正面の柵外右側に刻銘「寛文□□□□」とあることから、寛文年間(1661-1673)である。なお東には戒名を彫る。基礎上の塔身はほぼ正円になり、その上に載る笠の隅飾は、わずかに外側に傾斜する。また隅飾には、種字を刻む。笠の段は7段で、一番上が露盤である。その上に受花(下)を載せ、伏鉢から上は欠失している。受花(下)は下部と大きさの均整が取れていないことから、別塔のもの転用したと考えられる。

阿弥陀寺④ (図3-4・写真7)

この軀の津塔は、③の西側に立つ。周囲にはほかの石造物があり、台座や基礎の格狭間および刻銘の有無は実見できない。高さは基礎上端から宝珠上端まで、130cmである。基礎上の塔身はほぼ正円で、その上に載る笠に付された隅飾は、わずかに外側に傾斜する。笠の段は7段で、一番上が露盤である。受花(下)は欠失していて、露盤上に直接、一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠が載る。

阿弥陀寺⑤ (図3-5・写真7)

この軀の津塔は④の西側に立つ。周囲にはほかの石造物があり、台座や基礎の格狭間および刻銘の有無は実見できない。高さは、基礎上端から宝珠上端まで145cmである。基礎上の塔身は、やや肩が張った円形で、その上に載る笠に付された比較的大きな隅飾は、垂直に立つ。また隅飾には種字を刻む。笠の段は6段で、一番上が露盤である。露盤上には受花(下)を置き、その上に一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠を載せる。

阿弥陀寺⑥ (図3-6・写真8)

この軀の津塔は、⑤の西南側に立つ。高さは、台座下端から宝珠上端まで203cm(基礎下端からは185cm)である。地上に反花座を置き、その上に基礎を載せる。基礎の正側面は柵を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。造立年代は、正面の柵外右側の刻銘「寛文二^年□天」から、寛文2年(1662)である。基礎上の塔身は、ほぼ正円である。その上の笠に付された隅飾は、少し外側に傾斜している。笠の段は6段で、一番上が露盤である。その上に受花(下)と一石からなる伏鉢・受花(上)・宝珠を載せる。受花(下)から宝珠は、下部に比べると風食が大きいこと、均整が取れていないことから、別塔のものを転用したと考えられる。

阿弥陀寺⑦ (図3-7・写真9)

この軀の津塔は⑤の西側に立つ。基礎の下半分が地面に埋没していて、周囲にはほかの石造物があり、一面の格狭間しか確認できず、台座やその他の面の格狭間および刻銘の有無は実見できない。高さは基礎上端から宝珠上端まで139cmである。基礎上の塔身は、やや肩が張った円形である。その上の笠の下端は、わずかに反っている。これは、五輪塔の火輪が屋根状のものであるのに起因していると推測される。笠に反りを付けたものはほかになく、現存唯一の事例である。笠

に付された隅飾はわずかに外側に傾斜する。笠の段は6段で、一番上が露盤である。受花（下）は欠失していて、笠上に直接、一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠が載る。

阿弥陀寺⑧（図3-8・写真10）

この鞆の津塔は、⑦から離れた西側に立つ。高さは基礎下端から宝珠上端まで、191cmである。下部が地面に埋没した台座上に基礎を載せる。基礎の正側面は枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。枡や格狭間の彫りは、浅い。基礎上に正円に近い塔身を載せ、その上の笠に付された隅飾は、垂直に立つ。笠の段は6段で、一番上が露盤である。露盤上に受花（下）を置き、その上に一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。

阿弥陀寺⑨（図3-9・写真10）

この鞆の津塔は、⑧の西側に立つ。基礎の下部は、地面に埋没している。高さは、基礎上端から宝珠上端まで133cmである。基礎の正側面は、枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。東に戒名、その上に種字を刻む。基礎上の塔身はほぼ正円で、その上の笠の隅飾は垂直に立つ。笠は6段で、一番上が露盤である。露盤上に一石からなる受花と宝珠を置く。受花と宝珠には、四方にそれぞれ「風」と「空」の刻銘がある。笠や塔身と比べると風食が少なく、「風」や「空」の刻銘があることから、五輪塔のものを転用したと考えられる。また塔身と笠には種字が刻まれていないので、基礎とは別塔のものである。

阿弥陀寺⑩（図3-10・写真11）

この鞆の津塔は、⑨の西南側に立つ。高さは、基礎下端から宝珠上端まで191cmである。台座はなく基礎を直に地上に立てる。基礎の正側面は枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。造立年代は、正面の枡外右側に「寛文十貳^年天」、左側に「閏六月□□」と刻銘があることから、寛文12年（1672）閏6月である。正面の中央上部に「佛」、その下に戒名「智光妙□□信尼」を刻む。基礎上には、やや肩が張った塔身を置く。塔身には「陀」を刻む。その上の笠に付く隅飾は、比較的大きく外側に傾斜する。笠には、「弥」と刻む。笠の段は8段で、一番上が露盤である。露盤上に比較的大きな受花（下）を置き、その上に一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。伏鉢と受花（上）・宝珠には、それぞれ「阿」・「無」・「南」を刻む。年代が確定している鞆の津塔の

中で、最も新しいものである。

阿弥陀寺⑪（図3-11・写真11）

この鞆の津塔は、⑩の西側に立つ。高さは基礎下端から宝珠上端まで200cmである。下部が地面に埋没した台座上に基礎を載せる。基礎の正側面は枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。造立年代は、正面の枡外右側に「慶安四天」、左側に「五月□□」と刻銘があることから、慶安4年（1651）5月である。正面の中央上部に「佛」、その下の東部分に戒名を刻む。基礎上には、やや肩の張った円形の塔身を置く。塔身には「陀」を刻む。塔身上の笠に付された隅飾は、わずかに外側に傾斜する。笠の段は6段で、一番上が露盤である。その上に受花（下）を置き、さらに一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。笠・伏鉢・受花（上）・宝珠には、それぞれ「弥」・「阿」・「無」・「南」と刻む。

阿弥陀寺⑫（図3-12・写真12）

この鞆の津塔は、阿弥陀寺に存する12基のうち、最も西側に立つ。高さは、台座下端から宝珠上端まで233cm（基礎下端からは215cm）である。地上に反花座を置き、その上に基礎を載せる。基礎の正側面は枡を取り、正面は東で2分割した格狭間、側面は通常の格狭間を彫る。東部分に刻まれた戒名から、鞆の浦の商人である土佐屋に關係する人物の石塔と考えられる。基礎上の塔身は、肩が張った円形とし、その上に笠を載せる。笠に付された隅飾は、わずかに外側に傾斜する。笠の段は7段で、一番上が露盤である。その上に受花（下）を載せる。受花上には、一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。基礎・塔身・笠・受花（上）・宝珠に種字を刻む。この鞆の津塔は、造立年代が古い割に台座から宝珠までが完存し、種字が刻まれた貴重な事例である。

4. 宝大寺

宝大寺（広島県福山市沼隈町大字能登原）は臨済宗の寺院で、『福山志料』によると江戸時代は安国寺の末寺であった。宝大寺には2基の鞆の津塔があり、御住職の御教示によると地元の名家が造立したものである。本堂は東南を向いて立ち、その東側に庫裏が立つ。鞆の津塔は、庫裏の裏手にある墓地内に存している。

宝大寺①（図4-1・写真13）

この鞆の津塔は、宝大寺に存する2基のうち、向かって左側に立つ。造立年代は、基礎正面右端に「文

政元寅七月十四日」と刻銘があることから、文政元年（1818）7月14日である。台座下端から宝珠上端まで176cm（基礎下端からは152cm）である。地上に反花座を置き、その上に基礎を載せる。基礎に格狭間はなく、正面に造立年月とともに戒名を彫る。基礎上には、

押し潰したような楕円形の塔身を載せる。塔身に載る笠に付く隅飾は、ほぼ垂直に立つ。笠の段は1段しかない。その上に受花（下）と一石からなる伏鉢・受花（上）・宝珠を載せる。塔身・笠・受花（上）・宝珠にそれぞれ「水」・「火」・「風」・「空」の刻銘がある。

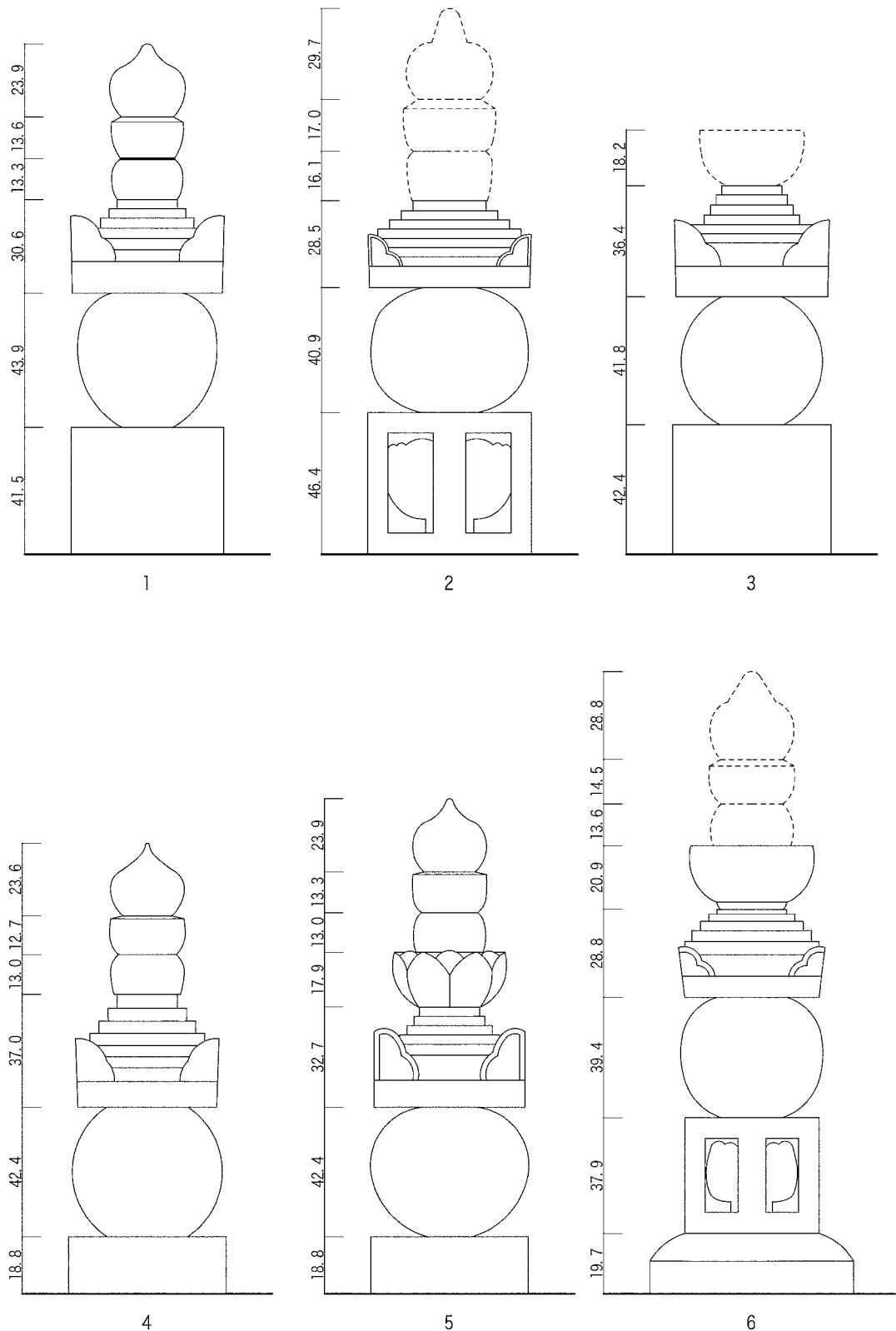


図3 鞆の津塔（阿弥陀寺）単位：cm

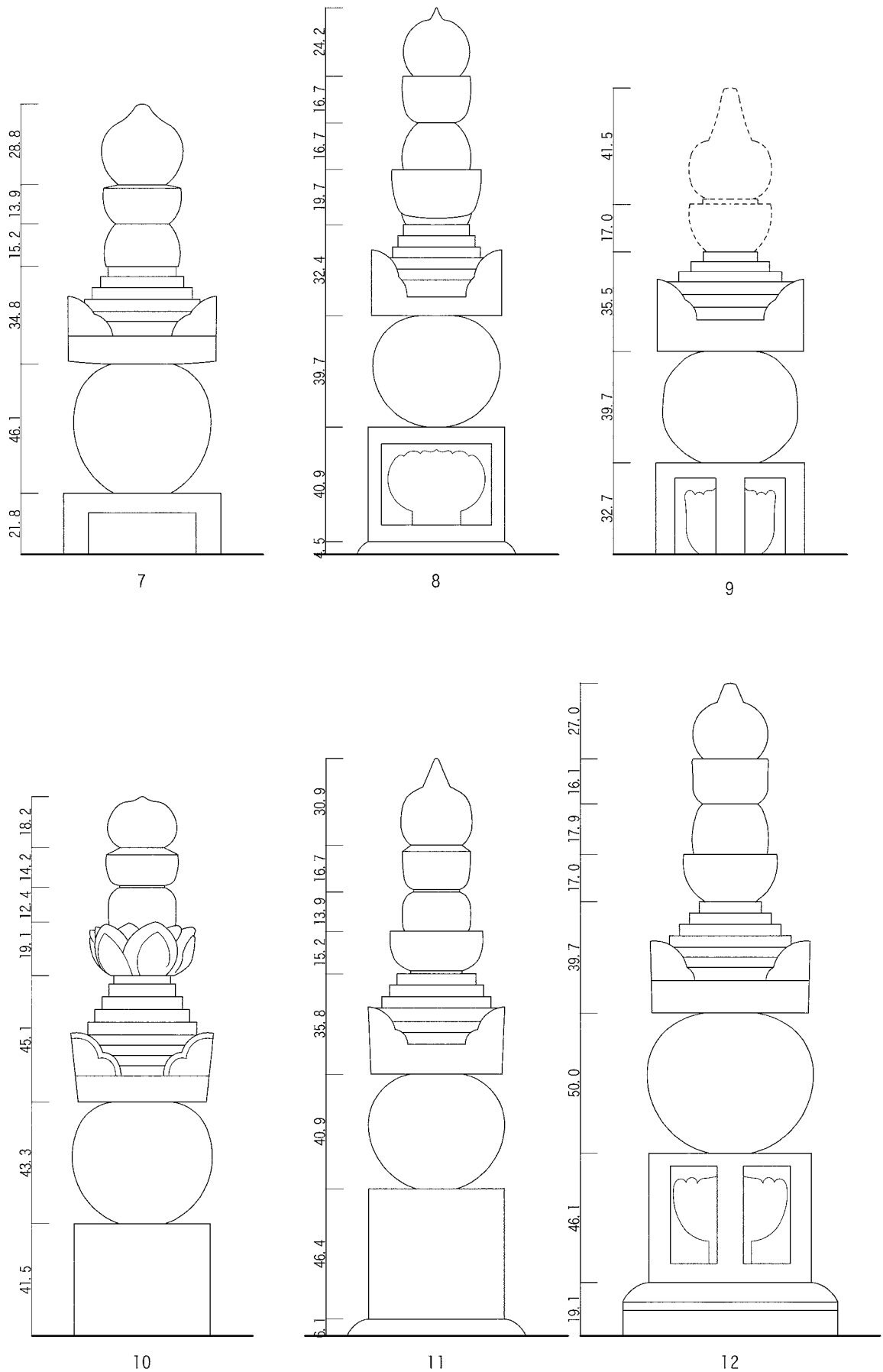


図3 鞆の津塔（阿弥陀寺）単位：cm



写真 1 安国寺



写真 2 大観寺①



写真 3 大観寺②



写真 4 阿弥陀寺①



写真 5 阿弥陀寺②



写真 6 阿弥陀寺③



写真 7 右：阿弥陀寺④ 左：阿弥陀寺⑤



写真 8 阿弥陀寺⑥



写真 9 阿弥陀寺⑦



写真 10 右：阿弥陀寺⑧
左：阿弥陀寺⑨



写真 11 右：阿弥陀寺⑩ 左：阿弥陀寺⑪



写真 12 阿弥陀寺⑫

宝大寺② (図 8-2・写真 13)

この鞆の津塔は、宝大寺に存する 2 基のうち、向かって右側に立つ。高さは、台座下端から宝珠上端まで 191cm (基礎下端からは 170cm) である。地上に反花座を置き、その上に基礎を載せる。基礎の正面は枠を取り、東で 2 分割したかなり形が崩れた格狭間を彫る。東に戒名、正面枠外右側に造立年を彫るが、風食が激しく判読できない。基礎上の塔身は、押し潰したような楕円形とし、その上に笠を載せる。笠に付された隅飾は、わずかに外側に傾斜する。笠の段は 1 段で、その上に受花 (下) を載せる。受花上には、一石からなる伏鉢・受花 (上)・宝珠を載せる。基礎・塔

身・笠・受花 (上)・宝珠には、順に「地」・「水」・「火」・「風」・「空」の刻銘がある。なお、笠より上は刻銘の位置より、右に 45 度回転していることが分かる。

IV. 形式上の特色

鞆の津塔の形式上の特色は、五輪塔と宝篋印塔の要素を混在させた独特な形にある。塔身を円形の五輪塔の水輪としていること、基礎・塔身・笠・受花 (上)・宝珠に、それぞれ「地」・「水」・「火」・「風」・「空」の文字が刻まれた事例があることから、基礎は地輪、塔身は水輪、笠は火輪、受花 (上) は風輪、宝珠は空輪と五輪塔の各部材に相当すると考えられる。なお、こ

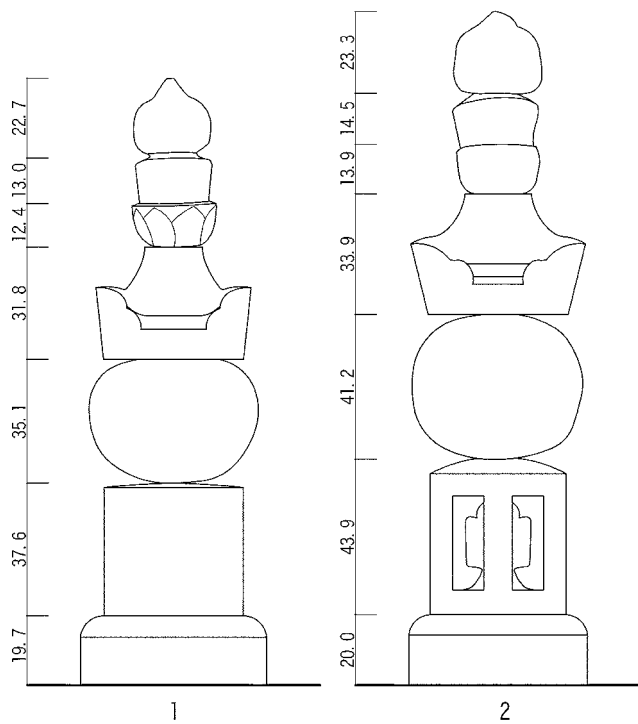


図4 鞆の津塔（宝大寺）単位：cm



写真13 左：宝大寺①
右：宝大寺②

のように基礎を円形とした石塔は、靈山寺変形宝篋印塔（静岡県沼津市）が著名である（川勝，1970）⁹⁾。

その他には、基礎に彫られた格狭間を挙げることができる。現存する15基のうち8基が基礎の正側に枡を取り、正面は彫り出した束で左右に2分割した格狭間、両側面に通常の格狭間を彫っている。宝篋印塔の基礎は格狭間を彫るが、2分割したものはなく、このように左右に2分割した格狭間は、管見にして例が

ない¹⁰⁾。左右の枡外に造立年月を刻み、戒名を刻む場所を造るために格狭間の真ん中に束を彫り出す形にしたのであろう。複数人を供養する場合は、安国寺のように2分割しない通常の格狭間の中に刻むか、大観寺②のように格狭間を彫らずに枡内に刻んでいる。

ところで、現在、鞆の浦に現存する15基の鞆の津塔のうち、台座から宝珠までが揃っているものは、5基である。このほか、台座は伴わないが、基礎から宝珠までが揃っているものが3基ある。

完存する5基の高さを見てみると、小さなものでも180cmを越え、大観寺②のように267cmあるものもある。また基礎から宝珠までが揃う3基の内2基⁷⁾が180cmを超えており、大名家が造立する墓石塔の規模に匹敵する。基礎に刻まれた戒名によると、鞆の津塔は鞆町の商人が造立したものであり、なおかつ阿弥陀寺⑩のように女性のもも含まれている。鞆の浦では、17世紀における鞆の商人の経済力はかなりの高水準にあったと推測され、他地域に比べると17世紀に造立された社寺建築が多く残されている（佐藤，2012）。鞆の津塔は後述するように17世紀頃に集中的に造られたと推測されるが、これはそうした裕福な商人の経済力を背景にしたものと考えられる。

V. 造立年代について

刻銘があり、造立年代が確定しているものは7基（但し、阿弥陀寺③は元号のみ）ある。正保3年（1646）の阿弥陀寺②が最も古く、慶安4年（1651）の阿弥陀寺⑪と承応3年（1654）の安国寺がこれに次ぐ。以下、寛文2年（1662）の阿弥陀寺⑥、寛文5年（1665）の大観寺②、寛文12年（1672）の阿弥陀寺⑩と続く。そして年代は確定しないが寛文年間（1661 - 1673）の阿弥陀寺③がある。

次に、造立年代が確定しない8基について、格狭間の形状（写真14）によってある程度の年代判定を試みておきたい。まず年代が確定している7基のうち格狭間を有するのは、阿弥陀寺②・③・⑥・⑩・⑪の5基である（阿弥陀寺③は有無の確認しかできなかった）。一般的に格狭間は、一筆目が水平もしくはやや下がり気味になっており、一筆目が二・三筆目よりも大きいものが古式とされている（天沼，1944；近藤，1972）。阿弥陀寺②・⑥・⑩・⑪は一筆目が明らかな円弧となっていること、さらに肩が落ちていることなどが江戸時代の形式と考えられる。

次に造立年代が確定しない7基の内、格狭間を有するのは、大観寺①・阿弥陀寺⑦、⑧、⑨、⑫の5基である。この内、大観寺①と阿弥陀寺⑫は、一筆目がほ



阿弥陀寺②



阿弥陀寺⑥



阿弥陀寺⑩



阿弥陀寺⑪



阿弥陀寺⑦



阿弥陀寺⑧



阿弥陀寺⑨



阿弥陀寺⑫

写真 14 格狭間

ば水平となっており、他の軀の津塔より古式と推察される。ただし風食の度合いは、他の軀の津塔と同程度もしくは若干経年が進んでいる程度であり、造立年代が室町時代である可能性は高くない。

阿弥陀寺⑦は、一筆目の右肩が上がっていること、阿弥陀寺⑧・⑨は、一筆目が明らかな円弧となっていることから、江戸時代の造立と考えられる。年代が確定した軀の津塔と風食の度合いが同程度であることからいずれも18世紀まで下るとは考えにくく、17世紀中に造立されたと推察される。

なお格狭間を有さない阿弥陀寺①・④・⑤については風食の度合いから、17世紀中の造立と考えて大過ないと思われる。このことから、軀の津塔は、断定はできないが17世紀中に集中的に造立されていたと推測される。

VI. 結語

以上のように、軀の津塔は、基礎正面に東で2分割した格狭間、両側面に通常の格狭間を彫ること、さらに隅飾が同時代の宝篋印塔と比べて外側への傾斜が極めて少なく伝統的であることが特色として挙げられる。また大凡の造立年代が17世紀頃と推測され、約100年の間に集中的に造立されたという可能性が指摘できた。さらに規模が大きく、そのような石塔の施主が商人であることなどが注目され、軀の浦の港町としての繁栄を物語る歴史資料として重要である。なお軀の津塔は、「球心宝篋印塔」の一種と考えられ、このような形式がどの地域から伝播したのかなど検討すべき課題は多いが、紙幅の都合上、別稿に譲ることにしたい。

【謝辞】

本調査に際しては安国寺・大観寺・阿弥陀寺・宝大寺の関係者の皆様には、大変お世話になり、地元の皆様・福山市教育委員会・三浦正幸氏（広島大学大学院文学研究科教授）・山口佳巳氏（調査時、日本学術振興会特別研究員、現、広島大学特別研究員）・曾我俊裕氏（広島大学大学院文学研究科大学院生）・良玄裕基氏（広島大学文学部学部生）には、実測図作成や写真撮影等に御助力をいただきました。また、査読者からは、論文を改善する適切な意見をいただきました。ここに記して感謝いたします。

【註】

- 1) 天沼俊一氏の研究に詳しい。
- 2) 軀の津塔という名称は、学術用語ではないが、地元では少

なからず用いられている。したがって本稿においても地元にて敬意を払い軀の津塔という名称を用いることにする。

- 3) 調査は、平成22年10月11日に行った。参加者は、三浦正幸（広島大学大学院文学研究科教授）・山口佳巳（調査時、日本学術振興会特別研究員、現、広島大学特別研究員）・佐藤大規・檀上浩二である。なお平成23年1月15日に補足調査を佐藤が行った。また宝大寺の調査は、平成25年8月4日に行った。参加者は、曾我俊裕（広島大学大学院文学研究科大学院生）・良玄裕基（広島大学文学部学部生）・佐藤である。
- 4) 『西備名区』卷二十三 瑞雲山 安国寺条（備後郷土史会編（1930）：『備後叢書 第4巻』歴史図書社。所収）慶長四年己亥、毛利中納言輝元郷、軀宰に命ぜられて造営あり。
- 5) 図の清書は佐藤が行った。写真は、写真13を曾我俊裕氏、それ以外は佐藤が撮影した。
- 6) 『あくた川のまき』心光山阿弥陀寺条（備後郷土史会編（1930）：『備後叢書 第4巻』歴史図書社。所収）開山は、阿蓮社天誓岬井上人となり。むかしより、いと久しき寺と云ひ傳へぬれと、永禄八年までの傳記なければ年代しかとしれず。それまでは此寺、かの古城山東の麓にありしを、慶長年中に此地にひけり。
- 7) 阿弥陀寺⑤は周囲にはほかの石造物があり、基礎上端からの高さしか測ることができなかった。その結果、基礎を含まない高さが145cmである。ほかの軀の津塔からして基礎の高さは30cm以上と考えられ、往時の高さは180cm前後であったと推測される。
- 8) 『福山志料』卷之二十四 沼隈郡 寶大寺 吉祥山臨濟宗安国寺末寺
- 9) 軀の浦にこのような特殊な石塔がどのような経路で伝わったのかなど検討すべきであるが、紙幅の都合上、別稿に譲ることにしたい。また川勝（1970）に対しては、反論（田岡、1975）が出されており、さらなる検証が必要と考えられる。
- 10) 例外として、軀町に存する福禅寺の五輪塔がある。刻銘によるとこの五輪塔は、寛文12年に造立されたものである。軀の津塔が造立された時期と同時期であることから、軀の津塔の影響を受けたものと考えられる。

【引用文献】

- 天沼俊一（1914）：豊後國東半島に於ける一種の石塔。建築雑誌，28，148-151。
- 天沼俊一（1926）：国東塔。仏教美術，8，11-42。
- 天沼俊一（1944）：『日本建築細部変遷小図録』星野書店。
- 川勝政太郎（1970）：駿河付近の五輪・宝篋印混合式石塔について。史迹と美術，40（2），42-53。

- 近藤豊（1972）：『古建築の細部意匠』大河出版。
- 佐藤大規（2011）：鞆の浦における社寺建築の建築年代と細部意匠。広島大学総合博物館研究報告, 3, 59-71.
- 田岡香逸（1975）：駿河霊山寺の正和三年宝篋印塔などー川勝博士の五輪・宝篋印混合式石塔の否定ー。史迹と美術, 45 (6), 211-230.
- 檀上浩二（2000）：鞆の津塔（仮称）について。福山市鞆の浦歴史民俗資料館編：『特別展 港町鞆の寺院ーその一 真言宗寺院ー』福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会, 43-45.
- 備後郷土史会編（1930）：『備後叢書 第4巻』歴史図書社。
- 福山志料刊行会（1968）：『福山志料（複製版）』福山志料刊行会。
(2013年8月31日受付)
- (2013年11月22日受理)